

作成日	2025年06月23日
学科名	国文学科

自己評価：S・**A**・B・C

<p>評価項目① 過年度からの改善・向上の取り組み</p> <p>(ア) 質保証の客観性・有効性を高めることを目的として、令和6年度に全学科で実施を依頼した、学生が参画したFDについて、そこで得られた成果・課題について記載してください。</p> <p>(イ) 昨年度の自己点検・評価において各組織で記述した課題・改善方策や、内部質保証推進会議からの提言を踏まえ、現時点における取り組み状況・成果について記載してください。</p>
<p>参照資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 過年度のFD実施報告書 ・ 令和6年度点検・評価シート ・ 令和6年度内部質保証推進会議からの提言 ・ 卒業時アンケート（大学） ・ ジェネリックスキル測定テスト ・ 資格取得や進路就職状況 ・ 各種会議の議事録等 ・ その他参照した資料（国文学科学科会議議事録）

【現状分析】

(ア) 初の試みとして、令和7年2月4日（15時30分～17時）に、「学生参画によるカリキュラム検討会」（90分）を実施した。学生主体のカリキュラム構築のため、学生からの意見を聴取し、どのような内容の科目が求められているか、そのニーズを探った。初回ということもあり、学士課程をほぼ終え、カリキュラム全体を理解している4回生の各ゼミ長（14名）に集まってもらった。学科全教員（国内研究中の教員除く）で対応し、受講している側からの要望（長所・短所）、導入して欲しい、あるいは改善して欲しいカリキュラムについての具体的な意見を聞いた。（国文学科学科会議2024年度議事録）

令和6年7月31日の14時45分から16時15分に、大学院担当教員と大学院在籍者・研修者（9名）による「大学院説明会」を学部生対象に実施した（令和5年度より継続）。学修のほか、専修免許取得のメリットなどキャリアに直結することについても説明した。参加学部生は1回生1名、2回生2名、3回生3名、4回生2名の計8名。このうち4回生の2名は令和7年度に本学大学院に進学しており、開催の意義は十分にあったと考えられる。（国文学科学科会議2024年度議事録）

1回生を対象に、10月2日～11月20日の毎週水曜日4講時に、国文学科1回生学びのサポート事業（伴走支援事業）を実施した（学生委員が統括し、運営はオーシャンズジャパンに委託）。7月下旬に上回生のチューターを募集し、3回生5名を採用することができた。当該事業は、入学後、授業の受け方や大学での学修方法に戸惑いを感じている学生の学習能力の向上を目指して企画したもので、また上級回生のチューターについては自分の体験や日常のことを総括して1回生に伝えるという指導的立場に立つことで、他者に対するコミュニケーション力の進展を期待したものである。1回生の参加者は9月5日～10月2日まで京女ポータルを利用して募集し、参加者は3名と少なかったが、3名とも熱心に参加し、事後のアンケートの結果も上々であった。オーシャンズ・ジャパン社の講師によるプログラムで、教員

は毎回その場で立ち会い、必要があればアドバイスするという立場であったが、プログラム終了後の毎回の「振り返りシート」では、受講生の PDCA への反応が良く、通常の授業でも導入によって効果が期待できるのではないかという知見を得た。(国文学科学科会議 2024 年度議事録・2024 年度国文学科学生伴走支援事業報告書)

(イ) 大学全体でも知識を活用する能力(リテラシー)は高いが、他大学より低いと判定されている行動特性(コンピテンシー)の向上は、昨年度も課題として挙げた。令和 6 年度実施のジェネリックテストの結果を見ても、それぞれの総合の結果は、

	国文学科 1 回生	私大女子 1 回生	国文学科 4 回生	私大女子 3, 4 回生
リテラシー	4.67	4.08	5.01	4.04
コンピテンシー	2.53	2.89	2.47	2.89

(R6_ジェネリックスキル測定テスト PROG (1 回生)・同 (4 回生))

と、コンピテンシーに関してはいずれも私大女子平均を下回っている。ただし、「【文学部】2024 年度 4 年生 PROG 全体傾向報告書」の「平均値でみる貴学のポジション 成長分析①」では、1 年次、3 年次ではリテラシー、コンピテンシーともあまり変化が見られないが、4 年次ではリテラシー総合では数値が下がっている(コンピテンシーは上昇)。英文学科 4 年と史学科 4 年の数値と比較すると、まだ低位にある。

外部からの評価が以上のものである一方で、学生自身は 4 年間で身につけた能力について、「組織を動かす能力」は 2.89 と「あまり当てはまらない」に該当する 2 点台だが、「相談された際に、相手の話を真剣に聞ける能力」3.23、「協力的に仕事を進める能力」3.16、「意見調整を進められる能力」3.18 と、「ある程度あてはまる」の 3 点台(「よく当てはまる」は 4 点)であり、学生自身はコンピテンシーに挙げられる行動特性が、「ある程度」身につけたと実感している。(卒業時アンケート 2024 年度)

方法については模索中であるが、コンピテンシーの向上の方法が模索されている企業において用いられている「実在型モデル」による啓発が参考になるように思われる。理想的なモデルの提示は一部の学生には有効かもしれないが、国文学科在籍の大半の学生には到達目標が高すぎ、効果が期待しにくい(現時点では実施検討中で未確定要素が多いため、課題欄で後述)。国文学科では、これまでも優秀な卒業論文・修士論文を在学学生を対象に発表する「論文発表会」を学科行事として行なってきたが、その際、そうした優秀な結果を残した学生の体験談として、取り組んだ過程やスケジュール管理等を参加者に対して話してもらっていた。ただ、行事に参加している学生は学修に対して高い意識を持っていることが多く、不参加の学生にこそ「実在型モデル」の行動規範として知ってほしいところである。

改善案としては、すべての在学学生が参考にできるように、文章あるいは図示などのかたちで提供するようにしたい。もちろん、発表した学生には許諾を得る必要があり、強制するわけにはいかないが、コンピテンシーの改善に資するところはあると考えられる。

また、学修支援部会で行なっている、成績優秀者奨学金受給者による、「ヨコの交流会」「タテの交流会」は、学部・学科、あるいは学年を越えた成績優秀者どうしの情報交換を通じて、コンピテンシーの向上に役立っている(学修支援部会の対象学生による参加後のアンケート)が、そうした優秀者はすなわち「実在型モデル」なのであるから、匿名でかまわないので、同じ学科の学生に示すという方法もあるのではと考えている。他にも優秀な学生はいると思

われるが、選定の基準があいまいになるので、基準の明確な成績優秀者奨学金受給者などはひとつの案たり得る。ただ金銭の関わっていることなので、プライバシーには慎重な配慮が必要である。ゼミについても、その分野ですぐれた能力を発揮している学生に「実在型モデル」となってもらえれば理想だが、選定や依頼にあたり同様の問題がある。高校生に自分の勉強方法や受験中の生活などを提示しているオープンキャンパスのスタッフなどに声をかけることも一案として検討している。

コンピテンシーについては、まだ模索状態にあるというのが社会での現状ということだが、国文学科としてはDPで示されている「思考・判断」の中の「主体的に課題を発見・解決できる。」、「対話・総合理解」の「対話・議論を通して、他者（異文化も含め）との相互理解・協調に努めることができる。」「社会性・自律性」の「組織の中で、自らの専門的知識・理解・技能、個性や能力を活かして協働できる。」等との関連において、とりあえず上記のような学修において高い成果を得ている「実在型モデル」による啓発を試みたい。卒業論文・修士論文発表会の発表者への依頼が、もっとも実現のハードルが低い（プライバシー等について発表依頼の時点である程度承認済み）。実在型モデルについては、2024年度も従来から実施している卒業論文発表会・優秀論文発表会を5月に開催し、卒業論文4、修士論文1について、各執筆者が学修に取り組んだ過程を出席した学生たちに話し、その内容は2024年9月発行の「女子大國文」第175号にも掲載し、学生の啓発に努めている。

【成果】

「学生参画によるカリキュラム検討会」では、対面で直接意見を聞くことで、「授業アンケート」ではわからない、各授業についての具体的な要望を聞くことが出来た。学科名称変更にとまなう今後の新カリキュラム策定においての大いに有意義な情報を得ることができた。

1回生前期「国文学基礎講座A」の一部として実施している、各分野の教員による専門分野のガイダンスであるリレー講義が好評で、もう少し詳細な、学科全体の学問を幅広く知ることのできる授業の開講を別途求める声が多く、これなどは新カリキュラムでの実施を検討する価値があると考えている。

また、実践・体験型の授業も要望が強く、「基礎演習A・B」での学外実習、「国文学特殊講義3B」での狂言の実演、「入門演習B」でのくずし字（写本・版本）の学習などが挙げられていた。

全体として、講読や特殊講義を通じて、分野・時代ともに、大学入学以前には知らなかったことを新規に、広く学べるカリキュラム構成になっていることの評価が高かった。また、アニメや漫画に関しては、国文学の専門に関する授業において、関連する文化・享受史として一部取り上げるならよいが、それに特化した授業は不要という意見もあり、本学を志向し、在籍する学生のニーズは必ずしも現代的な文化志向ではないことも知ることができた。ただし、これらはあくまで四年間を本学で過ごした学生の意見であり、令和8年度から令和9年度の新カリキュラムで開始予定で検討を進めている「京都文化観光学プログラム」では、「京ことば」「現代のポップカルチャーと京都」「花街」「芸能」などを扱い、「文献文化財入門」では本学所蔵の古典籍や海外稀覯本、出版文化などを内容とし、実際に現物を手に取って学修するプログラムを実施する。

一方で学科学生の特性かもしれないが、グループ学修（共同調査・発表）、集団論議（ディベート）などのアクティブ・ラーニングを増やすことには、さらなる増大を求める意見がある一方、

否定的な意見も聞かれた（学科会議資料）。後者の理由としては、グループ内での各成員間の学修努力の格差や非協力的なケースなど、やりづらさはもとより、そのことが自己の成績評価となってしまう点に納得がいかない、などであった。グループとしての評価の他、各個人の学修努力が反映される成績評価となるような、複眼的な評価方法を採用する必要がある。また、グループの成員をずっと固定するのではなく、組み替えを行うなどによって、受講者全体に不公平感のない仕組みとする必要もある。

従来は、教員各人が授業や演習を通じて個々に学生の声を聞いて共有してきたが、令和6年度に初めて行事として実施したことで、学生にとっては忌憚なく意見を述べることのできる場として腹蔵のない意見を述べていた。教員の側でも、新カリキュラム検討に反映させられる成果を得ることができた。（国文学科2024年度議事録）

【課題】

- ① 狂言・歌舞伎・演劇などのカリキュラムを求める声が多いが、必ずしもそれを専門とする専任教員が揃っているわけではないので、即応することが難しい。
- ② くずし字、文学の読み方・批評・作品分析の方法、現代の文学、書道文化など、基本的な学修のためのカリキュラムは設定されているが、より専門性の高い、よりその分野の学修を深めたいと希望する学生のための、特化した授業が設定されていない。
- ③ 同じ科目名の授業が開講されている場合、ひとつを履修してしまうと、もうひとつが受講できない。
- ④ 分野全般にわたる概説的・通史的な授業（専門性のあるリレー講義等）がない。（「国文学史1・2」「国語学概説」など基礎的知見のための授業は設定されている）
- ⑤ 3、4回生時のゼミで、上下の学年との交流がない。
- ⑥ シラバスの文章・内容が難しい。
- ⑦ 図書館が使いにくい。
- ⑧ 理想的なモデルの提示は、国文学科独自のコンピテンシーについて学科内で討議がなされておらず、国文学科在籍の学生への最適解となる理想モデルの設定が出来ていない。そのため現時点では効果が期待しにくい。
- ⑨ 「国文学科1回生学びのサポート事業（伴走支援事業）」の参加者が少なかった点。

【改善・発展方策】

学生から聴取した意見を参考にしながら（すべてを鵜呑みにするわけでないことはいまでもないが）、令和9年度からの新カリキュラムに活かしていく。現在、令和8年度の新規採用人事と併せ、新カリキュラムの検討を開始しているが、採用計画の決定を待っており、それが示されてから、新カリキュラムの授業の具体的内容や、それを実施するための新規採用人事を進める。新カリキュラム策定については、当然、期限が設定されるが、学科としては令和7年度末、遅くとも令和8年度早々までには策定する。具体的には以下。

- ① 演習Ⅰ・Ⅱは専任教員という原則があるので、新規採用人事が未定の現時点では確言しがたいが、当面、新カリキュラムでは少なくとも講義系の科目（特殊講義等）で非常勤講師による開講、あるいは新科目の設定で対応する。（令和9年度より開講予定）

- ② 新カリキュラム実施までは、現在行われているカリキュラムの中で、くずし字、文学の読み方・批評・作品分析の方法、現代の文学、書道文化、通史的授業などについて、専門分野・隣接分野の授業において、その比重を増やす。(令和8年度から実施。具体的にはシラバスで示す)
- ③ 卒業要件の総単位数内で、履修内容に学生の好みによって極端な偏りが生じるのは問題があるので、全体のバランスについて検討する必要がある、即応はできない。受講できるようにするには科目名の変更が必要なので、新カリキュラム開始に併せ、実施出来る方策(極端な偏りが生じないような一定の履修制限や同一分野重複履修単位は卒業要件の単位に含めない等)を検討する。(令和8年度から実施)
- ④ 新カリキュラムでは、あらたな概説的・通史的内容の科目を設置する。現在の時代・分野別の特集講義の組み替えにより、横断的な内容にすることも検討する。(令和9年度)
- ⑤ 上下回生の交流は、卒業論文をどこで書くかを選ぶことになる下級回生のほうに需要が多いと思われる。上級回生によるゼミ紹介については、対面・文書・動画等を検討する。(令和7年度から試行)
- ⑥ 専門的な文章・用語を知り、理解していくのも大学における学修なので、安易に平易にするわけにはいかないし、現在のシラバスで充分という声もあるが、シラバスチェックの際、表記・表現についても、極端に専門的な内容を、説明もなく記入していないか、極端に文語的な表現になっていないか等についても、チェックする。(令和7年度から実施)
- ⑦ 卒業論文・修士論文発表会当日に行われる、発表者による在学時の学修方法の説明は、京都女子大学国文学会発行の『女子大國文』(2025年9月発行予定)に掲載する予定である。また、発表を聴講した学生の感想も同じ号に掲載する予定で、当日、参加できなかった在学生にも周知を図る。成績優秀者による行動モデルについても、関係部署と調整の上、令和8年度の実施をスケジューリングする。
- ⑧ コンピテンシー向上のための理想型モデルについて、DPとの関連を含め、入学者のレベル、入学後の成績、在学生アンケートおよび卒業時アンケート等を参照して、理想型モデルについても令和9年度に向けての新カリキュラム策定の作業と並行して検討を進める(令和7年度～令和8年度)
- ⑨ 2024年度起案の新規事業であったため、実施が入学後半年を経た後期であったことすでに1回生が大学の学修に馴染んできていたこと、ポータルと授業(「入門演習」)による告知であったことで、行事の実施案内がじゅうぶんに行き渡らず、当初見込みの15名程度の参加者を大きく下回ったことは次年度以降の反省点である。実施時期の見直し(前期)や新入生ガイダンス、「国文学基礎講座」、「入門演習」、ポータル、さらには学修面談で、1回生とのあらゆるチャンネルを利用しての告知を行うことを決定している。資格課程の授業との重なりも問題であるが、業者側の都合との関連で難しい点もあるが、さらに協議する。参加学生からは好評であったこと、今後さらに学修補助が必要となる学生の増加が予測されることから、参加者の増加を図り事業継続する意義はある。

評価項目② カリキュラムの適切性と成果

- (ア) DP、CPに基づき、体系的な履修を促すカリキュラムとなっているか、記述してください。
 (イ) カリキュラムにおける常勤、非常勤の担当教員のバランスは適正か、記述してください。
 (ウ) DPの達成につながる学修成果を得られているか、ジェネリックスキル測定テストや卒業時アンケート結果等を分析・活用して、検証してください。

参照資料

- ・カリキュラムマップ、ツリー
- ・単位修得要領
- ・シラバス
- ・科目群別非常勤教員比率
- ・ジェネリックスキル測定テスト
- ・卒業時アンケート（大学）

【現状分析】

(ア) カリキュラムの体系的性

国文学科の「教育課程編成・実施の方針（CP）」にもとづき、1年次から順に学修を積み上げるカリキュラムを構築している。国文学・国語学・漢文学について、高度な専門知識・理解・技能を身につけるため、調査方法を学び、自己の力で分析して課題・問題点を見だし、論理的に考察し、他者に対して言語で適確に表現する能力を身につけられるようにしている。また、相互の意見交換による対話力・批判力を涵養できるようにもしている。講義科目、演習科目ともに学年がすすむにつれ、専門性が高まり、学生がより主体的に学び、発信できるシステムを構築している。関連の分野として、「国語科教育法」、「中国文学史」、「東洋思想史」、「民俗学」、「風俗文化史」、「仏教文化特殊講義」などの講義科目を開設して、総合的な専門知識を習得できる体系的な教育課程を編成し、実施している。

1年次では、「入門演習A」で古典文法を学び直し、「入門演習B」でくずし字を学び、4年間の学修の基礎を固めるようにしている。講義科目では、「国文学基礎講座」、「国語学概説」、「国文学史」、「国語史」、「漢文学」など、国文学・国語学やその周辺領域全般についての基礎的知識を身につけ、また講読等の講義科目で、古代から現代までの国文学や国語学の専門的な知見の入口となるようなカリキュラム編成にしている。

2年次では、引き続き専門的な講義で知見を深めることと平行して、前期・後期それぞれの1クラスの上限を15人（再履修生等除く）とした少人数によるゼミ（「基礎演習」）を設置して、発表によるプレゼンテーション力の涵養、レジュメやレポートの作成を通じて大学生として必要な技術（アカデミックスキル）の習得を進める。前期・後期で異なる分野・時代の演習を選択することで、国文学科ならではの幅の広い分野の知見を深め、3年次の「演習Ⅰ」への学修に繋がるようにしている。また、学外に出てフィールドワークを行うことで、京都・奈良等の文学的・歴史的風土についても体験学習させている。

3年次では、本格的に専門分野についての学修を開始する。特殊講義では国文学・国語学・仏教文化についての学修をさらに深めることを主眼に置いている。「演習Ⅰ」では国文学・国語学・漢文学の、各時代・分野の中から2つのゼミを選択して演習を行い、調査能力・批判力・論理的思考力の昂進を図るようにしている。その過程で、課題発見力や課題解決力を身

につけ、他者に対する表現能力・対話能力も養うようにしている。

4年次では、3年次に選択した「演習Ⅰ」から1つの分野に絞り、さらに専門性の高い知識・技能を身につける（「演習Ⅱ」）。自己で発見した課題・問題点について、指導教員の指導を受けながら4年間の学修の総合となる卒業論文を執筆する。その課程で身につけた問題解決能力も併せ、卒業後も生涯にわたって自己の力で学び続ける好奇心、能力、生き方の道筋の確立を目指す。

「学位授与の方針（DP）」と「教育課程編成・実施の方針（CP）」との関係については、「カリキュラムマップ」によって示している。DPの各項目と対応する科目がバランス良く配置され、体系的な科目編成となっていることが示されている。

作成した「カリキュラムツリー」を用いて、学年が進む過程でも自己の学修の方向性・位置を見失うことがないようにしている。具体的には、1年次には、新入生オリエンテーション、必修科目である「国文学基礎講座」・「入門演習」において繰り返し解説し、2年次、3年次では演習選択のクラス分けを行う後期に、卒業までの演習における高度で専門的な学修の流れと、関連する知見の学修について、さらに説明を重ねている。

（イ）常勤、非常勤の担当教員のバランス

国文学科専門科目の非常勤率は、2024年度は45%で、2021年度～2023年度の3年間ですべて38%であったことに比較すると、7ポイント高くなっている。要因は、

- （1）初年次の基礎教育の充実の必要性の増大や入学生の実数増（定員超過分）の結果、1年次でのサポートを厚くする必要性が生じ、「入門演習A・B」の1クラスの人数を低減したこと（特に入学時のクラス分けの文法テストの結果の低位層を、少ない人数で教員が細かく指導・観察し、入学後の履修からこぼれ落ちないように学科全体で注視するため）により、開講クラス数を増やし、非常勤講師にも担当を委嘱したこと。
- （2）2年次以降の演習において、近年学生の関心が高くなっている「現代日本語」関係に、学生が殺到する傾向が続いており、1クラスの受講人数が多くなって演習の適切な授業実施に支障が出ないよう、コマを分割して増やさざるを得なかった結果、教員の持ちゴマ数の関係で、講義系の科目を非常勤担当としたことである。過剰な非常勤依頼でないことは言うまでもないが、特に1年次「入門演習」の非常勤講師依頼にあたっては、初年次基礎教育に経験豊富な教員を選定し依頼している。また、非常勤講師任せにすることなく、初回授業には専任教員が教室に行って履修相談に対応する、窓口となる専任教員を置くなど、専任教員によるサポートを厚くし、学生の動向等についても密に連絡を取り、学科全体で情報共有する体制を設けている。

（ウ）DPの達成につながる学修成果を得られているか

「2024年度卒業時アンケート」に拠れば、「高度の専門的知識・理解・技能」については3.42、広い教養については3.32、宗教に対する正しい理解と正しい批判力については3.15と、いずれも「ある程度当てはまる」の3点台であり、他の項目に比べても高い数値になっている。

「汎用的技能」は、「外国語を使う能力」が2.42、「数理的思考とデータ分析・活用能力」が2.07、「情報通信技術やオフィスソフトを活用できる能力」が2.88と、すべて2点台にとどまり、学科の特性を反映しているようで、じゅうぶんな成果を挙げているとは言えない。「思

考・判断」「対話・相互理解」については、「相手の立場を考慮しながら、意見調整を進められる能力」3.18、「課題の原因を明らかにする能力」3.10、「情報を多角的に分析し、現状を正確に把握する能力」3.15、「社会のルールや人の約束を守る力」3.32 など、4年間の学習を通じて相応の能力が身についたと実感している。(2024年度卒業時アンケート)

【成果】

カリキュラムを確認し、自己の学修の流れの把握に資するよう、「京女ポータル」のCommunityに『学習の手引き』や『単位修得要領』等を集積したリンク集を作り、学生が一箇所を見れば常に参照できるように、学科として工夫をこらしてきた。また、Communityの「お知らせ」機能を活用し、演習履修等の重要な情報を学科・学年単位で配信できる環境も整えてきた。授業の資料・テキストに関しても、「わかりやすかったか」という質問に対して、2024年度前期では「非常にそう思う」35.1%、「そう思う」53.9%、後期ではそれぞれ39.5%、49.5%という回答結果であり、カリキュラムの内容についても適切だと確認できる。(授業アンケート 全回生)

カリキュラムの設定については、「授業の開講学年・学期は適切でしたか」という設問に対して、全学年の併せた数値として、「適切であった」が2024年度前期90.5%、後期93.5%、2023年度前期90.9%、後期91.9%という結果なので、学生にも適切なカリキュラム設定と受け入れられている。(授業アンケート 全回生)

学生の実感としては、「相談された際に、相手の話を真剣に聞ける能力」3.23、「協力的に仕事を進める能力」3.16、「意見調整を進められる能力」3.18と、「ある程度あてはまる」の3点台(「よく当てはまる」は4点)であり、他者に対しての種々の能力が「ある程度」身についたと実感しており、成果を挙げている。(卒業時アンケート 2024年度)

DPとの関係の成果は、「(ウ) DPの達成につながる学修成果を得られているか」に記述した。

【課題】

外国語能力とICT運用能力については、通常の授業(特に演習での資料調査や収集、プレゼンテーション資料の作成)でも基礎的レベルに到達できていない。技術の修得と向上が課題となっている。学科でも、「【国文学科全学年】学科の学習等に関するページのリンク」を学生に告示し、授業で活用する各種ソフト・アプリのマニュアルや図書館利用案内、学習で活用できる各種サイトを案内し、常時閲覧・参照できる環境を整えている。

また、学生への情報発信に関しては、新規の京女ポータルには、従来のCommunityないしはそれに代替する機能が実装されなかったため、SharePointに発信場所を切り替えて運用しているが、4月中旬から掲示板の機能が縮小された(専任教員でも、アドバイザーのクラスの学生以外には連絡できなくなった)ため、学年・学科単位での学生への連絡方法はメールのみとなってしまう、学年・学科単位での情報発信に困難が生じている。

【改善・発展方策】

柱の一つとして、志望者・受講者の多い(令和6年度卒業生128名のうち、およそ4分の1に

あたる 29 名が教員免許状取得、副免を含む取得件数は 55 件)、教職課程の「国語」専門のカリキュラムを充実させるべく、新カリキュラムでそうした科目を新設する。人事計画次第であるが、可能であれば令和 9 年度に開設する。また要望の強い、分野横断的な、あるいは通史的な科目も令和 9 年度からの新カリキュラムで策定する。(学園報 No. 1114 令和 7 年 5 月 20 日)

1 年次のサポートを厚くし、学生がカリキュラム構成をじゅうぶん理解して学修を進められるよう、令和 7 年度新入生相談(新入生オリエンテーション時)を入学直後に実施したが、これについてはその後もアドバイザーを中心に随時、相談にのり、情報を共有し、授業への参加状況や態度など、学科会議ごとに情報共有している。こうした相談の機会を設けていることを、新入生が認識できるよう、「国文学基礎講座」(原則、アドバイザーが担当)、「入門演習」などで繰り返し案内するなど、周知の方法を改善し、令和 8 年度も実施する。

調査・資料の作成、課題の提出などにおいて支障のない I C T 運用能力の涵養のため、初年次教育、特に「国文学基礎講座 A・B」「入門演習 A・B」の必修科目内において、使い方のガイダンスについては資料を作成して配布し、あるいは LMS 上に掲出するなどして啓発を行い、また、学生からトラブルの相談があり全学生に周知すべき技術・能力であると判断した場合には、その都度、対応のための資料を作成している。今後は説明だけでなく、学期初め、課題提出のある学期終わり近くに、擬似的に提出の訓練を実際に行い、受講者が I C T 運用能力不足により提出に支障が出るなどの事態に陥らないよう、確認する授業を実施する。すでに個別に実施している授業はあるが、学科として統一的に実施するようにする。「電子の蔵」を利用した基礎的な調査方法の修得(2 回生「基礎演習 A・B」)、学外のデータベースを利用した参考文献リスト作成(3 回生「演習 I A・I B」)なども同様に統一的に各授業内で実施する。

評価項目③ 成績評価

- (ア) 成績分布は、教員間で評価のバラつきが生じていないか。また、学科において検証・調整されているか記載してください。
- (イ) 成績評価、フィードバック等がシラバスに基づき適切に実施されているか、学修行動調査やALCS学修行動比較調査等の結果（評価の公平性の学生満足度）から検証し、記載してください。

参照資料

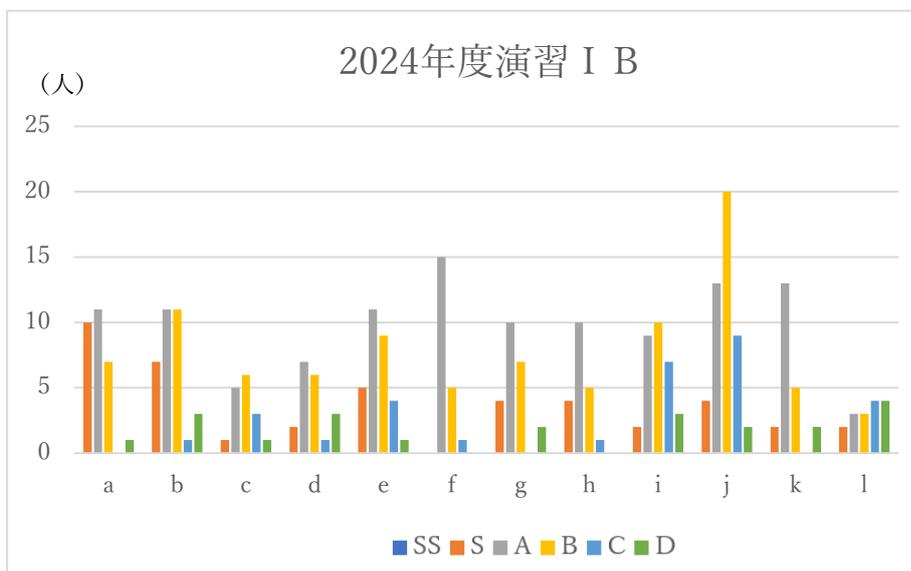
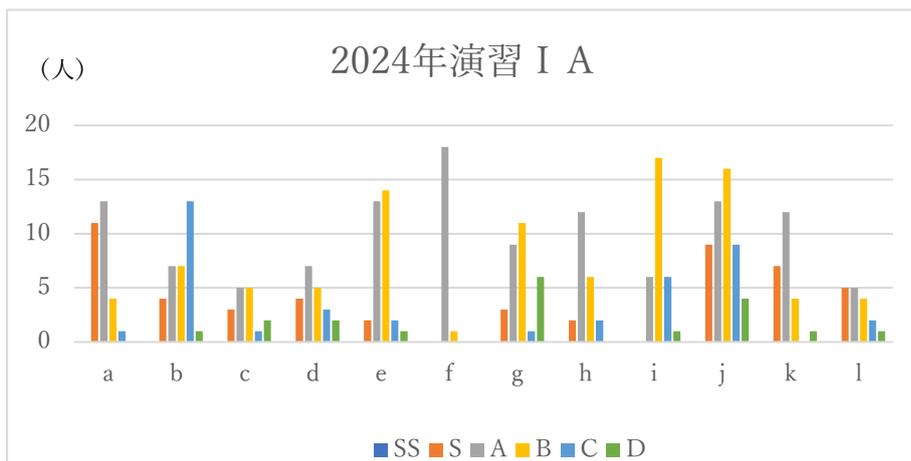
- ・各科目の成績分布
- ・学修行動調査の成績評価に関する設問
- ・ALCS学修行動比較調査（1・3回生）の「69. 評価のされ方」満足度結果
- ・その他参照した資料（学科会議議事録・入門演習クラス分けテスト結果）

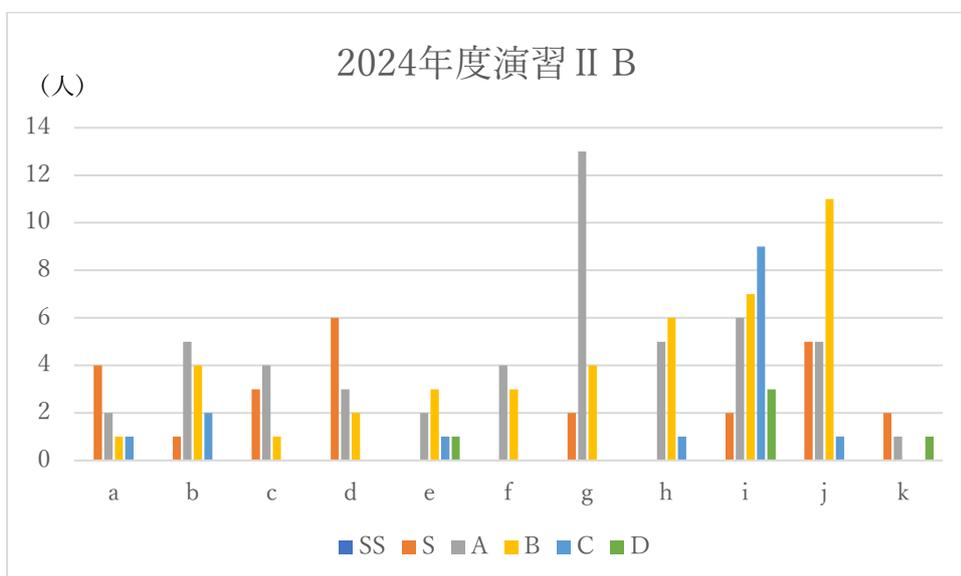
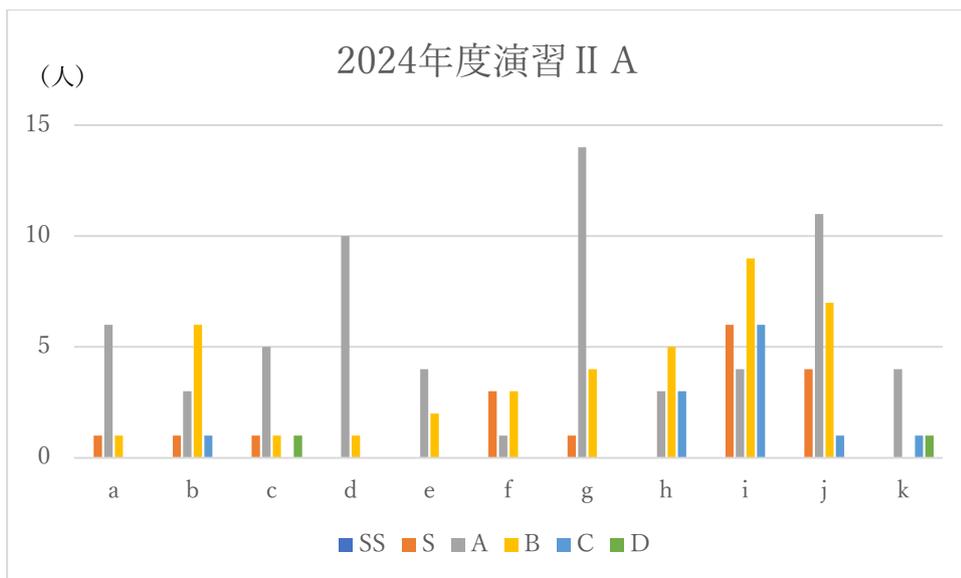
【現状分析】

(ア) 成績分布

専任教員全員（仏教学分野を除く）が担当している2024年度の「演習ⅠA・ⅠB」「演習ⅡA・ⅡB」について、それぞれの教員がどのような成績評価をしているか、データを比較すると次のような結果が得られた。

以下のグラフは、「各科目の成績分布」によって作成している。（担当の専任教員は11名であるが、演習ⅠA・ⅠBは複数クラス開講のゼミがあるため12）



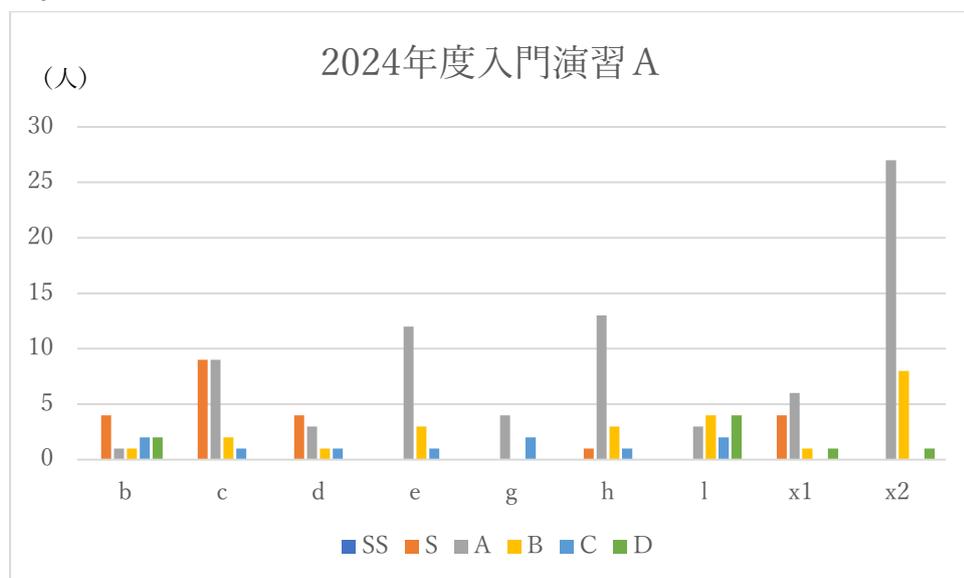


グラフの横軸は各教員を示す。SS 評価 (100) が 1 件もないのは、演習という科目の特性である。ゼミごとに学生による選択の結果の人数差があり、また作業内容の違いから絶対的な統一基準を設けるのは無理がある。

演習 I A・I B、演習 II A では、概ね A 評価 (80-89) と B 評価 (70-79) を頂点とした分布になっている教員が多数であり、特段の偏りは見受けられない。上位評価の A B 評価に山のある例もあるが、こまかな指導やフィードバックの成果の結果とも言える。D 評価 (0-59) は、授業の出席回数不足・不登校、授業内での発表を無断で放棄したなどのやむを得ない理由である。こうした学生には、履修への注意喚起や事前の相談などを行なっているが、精神面の不調によることが多く、学科教員のみでは解決が困難な事例が近年とみに増加している。

一方、演習 II B では、下位の評価に若干シフトしている傾向にあるが、卒業論文のための調査や中間発表など、よりシビアな作業や成果が求められている結果と考えられる。2024 年度から演習 II の結果が直接反映する卒業論文に関して、授業における作業過程や発表、文章化しての達成度について、学科でルーブリックを作成し、統一された基準での評価を実施した (「2024 年度国文

学科学科会議議事録』)。学生へのコメントバックもルーブリックの開示と同時に卒業前に行なった。



同一のテキストを用いての授業、入門演習 A（古典文法）の成績評価分布である。入学時に文法の基礎力テストを行い、その成績によってクラス分けしているため、各クラス間には、文法に関する力の差は相当の差が最初から存在している（2024 年度入門演習クラス分けテスト結果／学科学科会議議事録）が、S 評価もしくは A 評価にピークが来ており、初期の文法理解度は相当に異なるものの、学期末にはクラスごとの成績評価に著しい差は見られない。なお、横軸の x1、x2 は非常勤講師。

（イ）成績評価、フィードバック

フィードバックについては、1 年次の必修科目である国文学基礎講座では毎週授業内容について的小テストと提出されたものに対するフィードバックを行なっているほか、2 年次の基礎演習と 3 年次の演習 I では毎回の発表と提出されたレポートに対して、コメントと添削のほか、成績評価について基準の公表等を行なっている。

成績評価について「ALCS 学修行動比較調査（1・3 回生）の「69. 評価のされ方」満足度結果」によれば、国文学科は、

	1 回生	3 回生
2021 年	1.50	1.64
2022 年	1.34	1.45
2023 年	1.55	1.60
2024 年	1.38	1.62

という結果である。十分に満足 3 点、満足 2 点、少し満足 1 点、やや不満-1 点、不満-2 点、とても不満-3 点であるから、学生は自分の思っていた評価よりも低かったと感じている。1 回生は隔年で 1.5 台と 1.3 台、3 回生は 2022 年を除き 1.6 台で安定している。学年が進むにつれ、満足度が上昇しているのは、自己評価と大学での評価が一致してきていることを示している。2022 年度に 1 回生だった学生が 3 回生になって 1.34→1.62 となっているのは一定の評価を与えることができよう。

【成果】

教員ごとの成績評価の極端な差異や偏向を低減するために2024年度から、まずは卒業のための最大の成績評価である卒業論文について、演習Ⅱの授業の結果がどのように反映し、実践できているか、作業過程や発表、論理的思考を展開しての文章化による論述の達成度について、学科でルーブリックを作成し、統一された基準での評価を実施した。学生へのコメントバックもルーブリックの開示と同時に卒業前に行ない、卒業生から好評を得ている(2025年度学科会議議事録)。

【課題】

学生の評価のされ方による満足度については、現在のところ学科全体としては特段の方策を講じておらず課題となっている。

成績評価の教員間での調整・協議はまだじゅうぶんに進んでいない。全科目での実施は非常に困難であるが、全員が受講する必修科目での実施を、どの科目からどのようにして効果的に増やしていくかが課題である。

【改善・発展方策】

成績評価については、2024年度は卒業論文評価についてルーブリックを作成し実施したが、2025年度には全学の統一の方針に基づき、演習科目すべてで実施する。また、実施したルーブリックの評価項目についても、授業の具体的評価とのマッチングにまだ改善の余地があり、開示された評価基準や達成度が、学生の自己改善に直結するように、文言や項目を2025年度はもちろん、それ以降も毎年学科会議で検討し、ルーブリックとしての質を向上させる。ルーブリックはどうしても画一的になることは避けられないので、2024年に行なった演習Ⅱと卒業論文についてのコメントバックを継続しながら、2025年度末にはこちらでより専門分野に即した具体的なコメントを開示するようにする。

複数開講・複数教員担当による必修科目の成績評価は、2025年度からのルーブリックの導入によって、基準統一を図る(専門性が高くなり、扱う内容がゼミごとに分化する3回生「演習Ⅰ」と4回生「演習Ⅱ」から重点的に行なう)。1回生「入門演習A」では、すでに共通のテキストを作成して使用しているが、入学時のクラス分けテストによって編成しているため完全な基準統一での運用は難しいが、必須となる文法の項目については、各教員で検討の上で撰定し、その理解度・達成度を評価基準の基本とする。2回生「基礎演習」では、発表・授業への参加実態・レポートの各配点を決めて運用している。